

1. 生涯学習政策アドバイザーの派遣

～香川大学と香川県教育委員会との間に協定が締結されました～

【協定の内容】

平成18年3月29日に「国立大学法人香川大学と香川県教育委員会との生涯学習政策アドバイザーの派遣に係る協定書」の調印式が執り行われ、4月より生涯学習教育研究センター専任教員の派遣が始まりました。派遣の形態や職務内容は以下の通りです。

- 1)アドバイザー 生涯学習教育研究センター専任教員
- 2)派遣日 毎週水曜日 午後1時～5時
- 3)派遣場所 香川県教育委員会事務局生涯学習課
- 4)職務内容 ①生涯学習関係職員、社会教育関係者及び学校教育関係者等からの相談に応ずること。
②香川県及び市町の生涯学習・社会教育に関する施策に対する助言を行うこと。
③生涯学習・社会教育の振興に資する調査研究を行うこと。

【派遣の経緯】

生涯学習教育研究センターは香川大学の地域貢献部門を担うセンターであり、30年近い歴史をもっています。これまで公開講座以外にも、専任教員は生涯学習・社会教育行政の実施する研修講座の企画相談、行政の各種委員会委員、社会教育調査の協力実施、NPOの支援等において貢献してきました。それをもう一步踏み込むことでさらなる緊密な連携を図り、定期的に空間を共有することでフォーマルのみならずインフォーマルな情報をも共有しながら、時代に相応しい政策を両者で創り出すことも大きな目標のひとつです。社会教育には、学社融合*1(学校教育と社会教育の)という考え方がありますが、香川県教育委員会と香川大学が融合して莫大なエネルギーを生み出すことができるよう、関わりたいと考えています。

*1 学校教育と広義の社会教育がその一部を共有したり共有できる活動をつくりだし、一体となって取り組む教育・学習活動のことである。(『生涯学習研究e事典』より)



【相談内容の例】

これまでの派遣の際に、どのような相談が寄せられたかについて簡単に紹介します。

- 1) 香川県教育委員会生涯学習課の事業関連
 - ・生涯学習・社会教育関係研修のプログラム相談
(地域コーディネーター研修・子どもの育成フォーラム・子ども会研修会等)
 - ・かがわ県民カレッジのキャンパス講座(連携事業)の相談
 - ・女性のキャリア支援等のプログラム相談
 - ・地域活動支援講座に関するプログラム相談
- 2) 市町教委による相談
 - ・丸亀市より「生涯学習推進計画」策定に関する相談
- 3) 団体関連
 - ・香川県連合青年会より、「若者たちのサラダボール」の相談



【香川大学にとってのメリット】

また、専任教員が県教委に出向くだけでなく、県教委事務局や図書館・博物館等の職員の方々には香川大学の講義に参加して頂いています。あるときはビデオレターで、あるときは実際に大学キャンパスに来て頂くという形で、現場の生の声を学生に伝えたり、現在直面している課題についてともに検討するプロジェクトも試みています。

2. 公開シンポジウム＆ワークショップ 「災害に強いコミュニティづくり」のお知らせ

生涯学習教育研究センターでは、今年度の新しい試みとして、公開シンポジウム＆ワークショップを実施します。本企画は、『平成16年台風災害調査団報告書』の提言にもとづくもので、第1部では3名の防災の専門家によるパネルディスカッションを、第2部ではワークショップ形式により小人数に分かれてディスカッションを行います。みなさまのご参加をお待ちしております。

【第1部 シンポジウム:都市防災の現状と課題】

パネリスト 長谷川修一(香川大学工学部教授:安全システム建設工学)
室井 研二(香川大学教育学部助教授:都市社会学)
島津 昌代(高松赤十字病院:臨床心理士)
司 会 山本 珠美(香川大学生涯学習教育研究センター助教授)

【第2部 ワークショップ:災害対策のために、今、考えなければならないこと】

ファシリテーター 清國祐二・山本珠美(香川大学生涯学習教育研究センター助教授)

日 程: 2006年7月22日(土) 13:00～16:30

会 場: 香川大学研究交流スペース(香川大学研究交流棟5F)

定 員: 第1部 100名 第2部 50名

受講料: 無料

主 催: 香川大学生涯学習教育研究センター

共 催: 香川県

後 援: 香川県教育委員会、高松市、高松市教育委員会

参加申込先: 参加ご希望の方は7月14日(金)までに、当センターにご連絡下さい。

3. 平成18年度公開講座の追加募集、締切迫る！

昨年度より公開講座の募集を12月と6月の年2回実施しております。

メールにてすでにご連絡してありますとおり、6月1日より今年度後期分の公開講座追加募集が始まりました。締切は今月末です。計画の詳細は本センター専任教員との協議の中で詰めていただければ結構ですので、頭の片隅に構想がありましたら、是非ともお申し込み下さるようお願いいたします。



申 込 先: センター事務局

内線:1273 メール:syogse@ao.kagawa-u.ac.jp



問合せ先: センター専任教員 清國祐二

内線:1272 メール:kiyokuni@cc.kagawa-u.ac.jp

センター雑感

朝一コマ目の科目を担当している。受講学生はおよそ80名程度。授業開始時に私が発する「おはようございます！」の声に、最初は見事に反応がなかった。多少声を出している学生もいないわけではないが、「★※△♪」、おいおい、何語喋ってるんだ？このテンションの低さ、なんとかならないものか、と、まずは挨拶の練習から始めた。当初は冷めていた学生も、「やり直し！今の3倍の声を出しなさい！」との私のしつこさ(?)に、しぶしぶ声を出すように。でも、次の授業ではまた1からやり直し。そんなことの繰り返しだったが、最近ようやく元気な声で「おはようございます！」が返ってくるようになった。やはり、その方が清々しい気持ちで授業がはじめられる。(山本)

1. 公開シンポジウム＆ワークショップ 「災害に強いコミュニティづくり」が開催されました

さる7月22日(土)13:00～16:30、研究交流棟にて、公開シンポジウム＆ワークショップ「災害に強いコミュニティづくり」(主催:香川大学生涯学習教育研究センター、共催:香川県、後援:香川県教育委員会、高松市、高松市教育委員会)を実施しました。これは、『平成16年台風災害調査団報告書』の提言にもとづき、生涯学習教育研究センターの新規事業として企画したものです。



【パネリストの先生方(写真左から)】

長谷川修一工学部教授(安全システム建設工学)

室井研二教育学部助教授(都市社会学)

島津昌代臨床心理士(高松赤十字病院)

第1部では、まずはじめに、加野芳正センター長(当時)の挨拶の後、細末英正香川県防災局長から今年7月15日に公布・施行されたばかりの香川県防災対策基本条例についてご説明がありました。つづいて、学内外からお招きした3名の防災の専門家によるパネルディスカッションを行いました。

長谷川先生からは、「敵(=災害)を知り、己(=住居・職場等の災害リスク)を知る」ために、高松で発生した過去の災害と今後の対策のあり方について、多様な資料をもとにご説明頂きました。室井先生からは、他地域との比較として、2003年の九州水害、とりわけ太宰府市と飯塚市を例に、災害発生時の人の動きをコミュニティとの関係を交えてご発表頂きました。そして、島津先生からは、災害時の心のケアについて、中越地震の例なども挙げつつ、ストレスが発生する仕組みやストレス反応の諸相についてご報告頂きました。また、会場からは災害弱者対策と現在の個人情報保護法の矛盾を指摘する声が挙がるなどしました。



第2部は、「災害対策のために、今、考えなければならないこと」と題し、左の写真のように小グループに分かれ、パネリストも交えつつ、車座になってディスカッションを行いました。参加者には地域防災に関わっていらっしゃる方が多く、各グループともそれぞれの地域で抱えている問題などについて、活発な意見交換が見られました。参加者から「時間が足りない!」と指摘され、今後の反省としたいと思います。

なお、当日の様子は、NHKのニュースでも報道されました。(文責:山本珠美)



2.『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第11号のお知らせ

毎年発行している『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』は、生涯学習を研究する本学教員、センターが主催あるいは協力する講座等を担当した本学教員であれば、誰でも投稿することができます。

最新号(第11号)の内容は以下のとおりです。ご関心のある方はセンター事務室までお問い合わせ下さい。なお、次号(第12号)の原稿募集につきましては、本年12月初旬に正式に通知いたします。

<シンポジウム>

2003年九州水害の社会学的研究(1)ー太宰府市における開発とコミュニティー 室井研二(教育学部)

<研究論文>

高度情報社会における子育て支援の新しい試みとその検証(1)

ー携帯掲示板の中の母親のコミュニケーションから考えるー

清國祐二(センター)

生涯学習の推進を図るための参加型学習の方法論(1)

清國祐二(センター)

地域での遊びとプレーパーク栗林プレーパークの3年間の記録からー

清國祐二(センター)

ベルギーにおけるパブリック・フォーラムの試み

ー論争的な科学・技術についての熟慮過程ー

山本珠美(センター)

かがわ県民カレッジ研究・実践講座受講生アンケート調査報告

ー大学における社会人(成人)学習者の学びに関するー考察ー

山本珠美(センター)

3.新刊紹介

鈴木眞理・松岡廣路編著『社会教育の基礎』学文社、2006年8月

* * * * *

本書は、社会教育について初めて学ぶ人のために、その総体を包括的に理解してもらうためのテキストとして基本的には編集されています。それに加えて、近年の急激に変化する社会環境の中で、社会教育において視野に入れるべき新しい視点を若手研究者の感性で鋭く切り込んでいます。大学生のみならず、社会教育職員の研修にも活用できる良書に仕上がっています。

* * * * *



<センター専任教員の担当執筆章>

第7章「学習支援方法の諸相」(清國祐二)

キーワード:インセンティブ/モチベーション 共同学習 個人学習 集合学習 高度情報社会

情報リテラシー 遠隔教育 参加型学習/ワークショップ グループワーク ファシリテーター

体験学習/ボランティア学習

第11章「社会教育の国際的展開」(山本珠美)

キーワード:啓蒙主義 社会運動 識字 万人のための教育 ユネスコ 自己主導的学習 学習権

リカレント教育 多文化共生 持続可能な開発 NGO グローバリゼーション コミュニティ教育

センター雑感

今年の夏はワークショップに始まり、ワークショップで閉じた。ワークショップに関する共同研究を始めて足かけ4年、集大成の年というつもりで臨んだ。講座のダブルヘッダーは普通で、トリプルヘッダーもあった。振り返ってみて、疲れを感じさせなかったのは参加者の能動的な姿勢であった。ワークショップの主役が参加者であるのはいうまでもない。一方、私の役割はファシリテーターだ。ファシリテーターとは直訳すれば学習促進者であるが、学習者の相互作用により学習成果を高める触媒の役割が期待される。その役割に徹しきれていたかどうかは怪しいが、いくらかは自分自身の成長を実感できた。この世界に深く入り込むと怖さも感じる。「やったような気になる」勘違いである。学習は変容をともなって成長に結ぶ。バシリテーター、バクリテーター等いろんな造語が生まれているワークショップの世界、こやつはかなり手強い。(清國)

1. 公開セミナー「暮らしとお金の基礎を学びましょう」が開催されました

さる11月8日(水)～29日(水)10:00～12:00、研究交流棟5階にて、公開セミナー「暮らしとお金の基礎を学びましょう」を実施しました。本セミナーは、野村證券が社会貢献(フィランソロピー)事業として2003年より本格的に開始した事業で、本年度は野村證券の熱心な働きかけにより生涯学習教育研究センターの主催事業として実現したセミナーです。



回	テ　　マ	講　　師
1	日本の経済と金融	藤井宏史(香川大学)
	お金の上手な活かし方	原田伸之(野村證券)
2	暮らしとお金	東原好之(野村證券)
3	金融商品の基礎	瓦林眞一(野村證券)
4	マネー新時代の資産管理	東原好之(野村證券)

ったことに加えて、景気の回復と将来のための資産運用への関心の高まりから受講申し込みも定員50名をほぼ満し、盛況のうちに講座を終了することができました。

さて、一方で本セミナーの開催にあたりましては、いくつかの課題をクリアしなければなりませんでした。投資をうながすような金融学習が大学が主催するセミナーとして相応しいのか、数ある金融機関の中で特定の証券会社との連携に問題はないのか、というものが最大の課題でした。これらを解決するために、野村證券との連携講座を先行して行っている他大学より成果と課題を聞き取りしたり、生涯学習関連の雑誌記事からその趣旨や事業実践について調査しました。また、主催セミナーを外部委託するような形態は今後の本センターの位置づけにも関わるため、慎重に協議しました。紙幅の関係で詳細を述べることはできませんが、このような協議を経て、実施にいたりしました。

初回の様子を紹介しますと、阿部文雄センター長による挨拶があり、藤井宏史教授(経済学部)から「日本の経済と金融」をテーマに現在までの金融市場の動向を実にわかりやすく熱心にご講義いただきました。続いて、原田伸之氏(野村證券)よりお金にまつわる身近なトピックをユーモアも交えながら、お話しいただきました。宝くじの確率について触れたかと思えば、人間の心理に深く迫り、問いかけ方はクイズ番組の司会者ばりで、あっという間の1時間が過ぎました。参加者も熱心な方々ばかりで、メモをとりながら学んでいました。

アンケートでも好評を得ましたので、次年度以降のセミナーの内容を発展的に組み替えて、継続実施したいと考えています。(文責:清國祐二)



2. 社会人学生の日から見た香川大学 ～かがわ県民カレッジ研究・実践講座受講生アンケートより～

(1) 調査の概要

一昨年度のニューズレター（No.1 Vo.3）でご紹介しましたとおり、平成16年3月に香川県教育委員会と香川大学との間で結ばれた協定により、かがわ県民カレッジの一環として、一部の学部専門科目において地域住民の方々（カレッジ生）が本学学生に交じって授業を受けられています。彼らの実態や意見・感想を知ること、香川大学を地域の生涯学習施設としてより一層活用させる方策を探るため、本年1月30日～2月13日、平成16・17年度の修了生（見込含む）計53名にアンケートを郵送し、42名から回答を得ました（回収率79.2%）。以下、抜粋してご報告いたします。今後のご参考として頂ければ幸いです。

(2) カレッジ生の実態

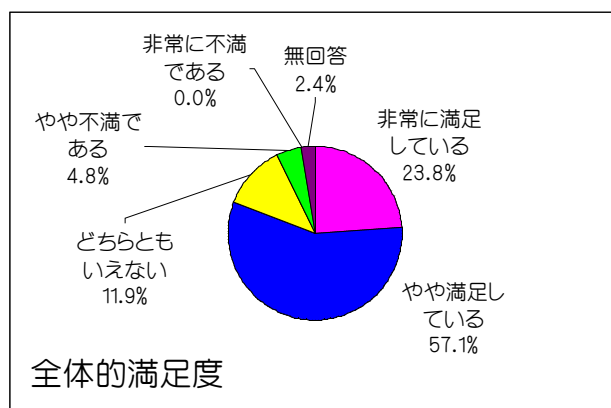
①属性 性別では女性が圧倒的に多く（85.7%）、年代では50代以上が4分の3を（76.2%）、60代以上が半数弱を（47.6%）占めています。最終学歴では高校（旧制中学等を含む）および短大・高専が拮抗しており（それぞれ35.7%、33.3%）、大学はやや少なめ（23.8%）です。

②教員の熱意 教員の教育に対する熱意については、回答者のうち1名を除いて「大いに感じられた」「おおむね感じられた」と答えており、教員の熱意は評価されていると言って良いでしょう。

③講座内容の理解 講座内容の理解についても、回答者のうち1名を除いて「よく理解できた」「おおむね理解できた」と答えており、カレッジ生にとっておおむね理解できる内容であったことが伺われます。

④全体的満足度 カレッジ生の4分の1弱（23.8%）が「非常に満足している」、6割弱（57.1%）が「やや満足している」と答えており、あわせて8割強（81%）が満足しているようです。

最終学歴	人数	%
高校(旧制中学等を含む)	15	35.7
短大・高専	14	33.3
大学	10	23.8
その他	3	7.1
合計	42	100.0



(3) カレッジ生にとっての大学

それでは、カレッジ生はそもそも何を求めて香川大学で学ぼうと思ったのでしょうか。

大学に対する期待として12の選択肢を設け、それぞれに得点を付けてもらったところ、「**知識を広げたり、理解を深めたりすること**」「**学ぶことや向上することの楽しさを味わうこと**」などの学習指向の選択肢、また「**人と知り合ったり、社会とのつながりをもつこと**」が上位にランキングされました。

ただし、同じ選択肢を用いて達成度を質問してみたところ、「知識を広げたり、理解を深めたりすること」において（期待－達成度）の差が最も大きいという結果が出ました。カレッジ生の高い学習志向に十分

出現回数	キーワード
21	知識
12	自分(自己/自分自身)
11	社会
9	得る
8	できる(出来る)
7	知的 学ぶ
6	交流(合流)
5	深める 身につける 専門 学習(学び)
4	思ふ 高める 挑戦する(チャレンジする/試す) 満たす 確認 好奇心 人生 友人(友・先輩・同輩・後輩/仲間/同胞) 勉強(勉学) 若者(若人/若い人/若い学生)
3	広げる 向上 探求 課題(問題) 基本(基礎) 技能(スキル)

答えられていないということになりますが、全15回の授業の全部ではなく部分参加であったため、一般の学生と同じようにもっと授業を受けたかったという思いが原因ではないかと推測されます。

ところで、『私にとって大学とは～である。』の『～』を埋めて下さい。』という質問に対する回答を、キーワード分析してみたところ、左表のような出現回数となりました。「**知識**」を筆頭に、「**自分**」「**社会**」という言葉が続きます。学びに関する言葉が多いのですが、「**交流**」「**友人**」といったあたりに目もひかれます。

(4) カレッジ生目から見た香川大学～自由記述の分析を通して～

次に、自由記述欄の意見・感想をご紹介します。(読みやすさを考慮し多少訂正してあります。)

- ①学習の深まり 「この問題は法的にはどうなのかなあと思うことがあっても、以前は六法を開くのが煩わしかったが、**何はともあれ六法にすぐに手が出せるようになった。**」のような感想は、教員冥利につきるという思いがします。知識が深まったという意見は多かったのですが、一方で、「**参考図書などを紹介してくれるとありがたかった。**」「**これからもう少し深めて学びたいとき、どんな方法があるのか教えていただけたらうれしいです。**」のように、学習をより一層深めるためのアドバイスを求める声も見られました。
- ②レポート 「いざ書くとなると、書き方に悩みました。」という意見がありましたが、社会人に対しては書き方について多少丁寧に説明する必要があると思われます。また、レポート返却を求める声も相次ぎました。「提出したレポートを返さないのが今の方式のようですが、これはやはり粗末ながらも相当の時間を擁して書いた者にとっては、いかがなものかと考えます。」
- ③本学学生 教員に対しては概ね好意的な印象を持って下さったようですが、学生に対しては「遅刻してくる生徒が多くて戸惑いました。」「**学生は真摯に授業を受けていない。もっと授業を受ける態度を指摘すべきである。**」など、厳しい意見が相次ぎました。とはいえ、学生との交流を望む声は強く、「学生と同じ教室で学べることは『何かあるのではないか』と期待していたが、**最後まで学生との関係は希薄であったことが残念です。**」のような意見が頻出しました。一方、何らかの交流が授業中にあった場合、「若い人の考えがよく理解できました。**彼らを見直す機会になり、非常に有意義でした。**」との感想も見られました。
- ④環境・設備 学内美化についても多くの厳しい意見が出されました。「**教室が散らかっているのに学生さんたちは平気という姿にはショックを受けました。**」「**黒板を誰が消して新たに授業を受ける？**」
- ⑤その他 次のような“応援メッセージ”もありましたのでご紹介しておきましょう。「企業や一般社会に目を向けて開かれた大学になりつつあるのではないかと感じています。**地域に根ざした大学は、学びたい意欲のある者にとっては魅力のあることだと思います。**…特色ある豊かな大学を望んでいます。」

(5) アンケート結果を読む視点

少子化が進行する中、入学者の確保もさることながら、地域に「香川大学が必要だ」と思う層が厚くなることが求められています。そのためには、研究面で地域の企業・自治体との連携を進めることはもちろんですが、地域の人々が学ぶ場として大学を開いていくことも必要です。それは単に授業を公開すればよいというだけでなく、彼らに快く学んでもらうための様々な環境整備も含まれます。彼らの香川大学に対する評価を高めることに成功するならば、地域における香川大学のサポーター的役割を果たしてくれることになるでしょうし、反対に失敗すれば、カレッジ生のみならず地域における香川大学の評価を低めることになりかねません。それゆえ、かがわ県民カレッジ研究・実践講座で学んだカレッジ生の(正規課程に在籍していないという意味での第三者的な)目から見た香川大学の姿に対しては、大学全体で真摯に耳を傾ける必要があるでしょう。(文責:山本珠美)

※なお、本アンケート結果の詳細については、『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告第11号』掲載の「かがわ県民カレッジ研究・実践講座受講生アンケート調査報告～大学における社会人(成人)学習者の学びに関する一考察～」をご覧くださいと思います。

3. 第28回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会

2006年11月30日(木)、12月1日(金)の二日間、大分県の別府亀の井ホテルにて第28回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会が開催され、当センターからは総務グループの長尾光三が出席しました。

初日は大分大学長羽野忠氏の挨拶、文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課専門官吉岡富雄氏による記念講演の後、全体会協議として、本研究協議会の組織・活動のあり方や共同研究、交流の活発化についての提案がなされました。全体会の後は、「第1分科会:地方行政改革進行下における生涯学習・社会教育部局と生涯学習センターの連携」「第2分科会:生涯学習事業の意義再検討～公開講座は収益事業か?それとも社会貢献事業か?～」「第3分科会:専門職支援講座～小中高教員や地方自治体職員など専門職のキャリアアップ支援講座の開設について～」「第4分科会:大学開放事業における事務職員の業務と力量～職員の関与、広報戦略、事務組織のあり方、力量形成など～」の4つの分科会に分かれ(二日目も継続)、活発な討議が行われました。

4.「公開講座の在り方に関する調査研究フォーラム」報告

2006年10月6日(金)、茨城大学にて「公開講座の在り方に関する調査研究フォーラム」(主催:文部科学省、放送大学、茨城大学)が開催され、専任教員山本珠美がパネリストとして出席し、香川大学の現状について報告しました。3年間にわたる本調査研究は今年が最終年度にあたり、「公開講座の質とその保証ー公開講座にかかる教員の業績評価をめぐるー」を全体テーマとして討議が行われました。公開講座担当教員に対する報酬は、アンケートに回答した全国の大学・短大の半数弱が一切の手当なし、半数強が謝金・給与へ上乗せという状況の中、受講料を研究費として配分するという本学のユニークな取組が注目を集めました。



なお、本フォーラムの詳細は、今年度末に放送大学から発行される『平成18年度文部科学省委託事業大学等開放推進事業報告書』に掲載される予定です。

5. 平成19年度公開講座募集

すでにメール等でお伝えしております通り、12月4日より来年度の公開講座の募集が始まっております。開講ご希望の方は、**平成19年1月22日(月)まで**に、配布いたしました計画書をセンター事務室までご提出下さい。

公開講座は香川大学の教育面での地域貢献事業です。講義だけでなく実習・実技なども積極的に取り入れた、魅力的な企画をお待ちしております。

◆ 申込先: センター事務室 内線1273 syogse@ao.kagawa-u.ac.jp
◆ 問合せ先: センター専任教員 清國祐二 内線1272 kiyokuni@cc.kagawa-u.ac.jp

6.『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第12号原稿募集

当センターでは毎年度『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』を発行しております。生涯学習を研究する本学教員、センターが主催する講座等を担当した本学教員、また、センターが主催する講座等を担当した学外講師で編集委員会が認めた者であれば、どなたでも投稿することができます。

すでにメールでお伝えしております通り、投稿ご希望の方は、所属、氏名、論文仮タイトルを**平成19年1月22日(月)まで**にセンター事務室または下記担当教員までご連絡下さい。

原稿締切は**平成19年2月28日(水)**です。多くの方のご投稿をお待ちしております。

(なお、投稿要領の改定により、本号から原稿の電子化を行い、センターHPに順次公開する予定です。)

◆ 申込先: センター事務室 内線1273 syogse@ao.kagawa-u.ac.jp
◆ 問合せ先: センター専任教員 山本珠美 内線1271 yamamoto@cc.kagawa-u.ac.jp

センター雑感

神奈川県出身の私は、香川大学へ赴任するまで、神奈川・東京・埼玉・静岡・山梨といったあたりをうろついていたので、四国には全くご縁がありませんでした(観光での訪問もなし)。ですから、香川県内に直接の知り合いなどいるはずもない、と思っていたら、あにはからんや、なんと大学時代のサークルの後輩がいました。それも学内に!! 4年くらい前まではお互いの動向を把握していたのですが、ここ数年は情報が途絶えており、また、同じ部局でない顔を合わすこともないので半年間気づかなかったのですが、前号のニューズレターを読んだ後輩が私の名前を発見し、10数年ぶりに再会を果たした、という次第です。ニューズレターを発行していなければ、いまだに気づいていなかったかもしれません。今号にもそんなドラマが待っていないかな?(山本)

1. キャリア懇談会が開催されました ～生涯学習教育研究センターとキャリア支援センターの連携事業～

生涯学習教育研究センターでは、香川県教育委員会と平成16年3月に締結した協定に基づき、香川県内の指導者養成(「かがわ県民カレッジ」)を行っています。香川大学としては養成講座の最終段階となる「研究・実践講座」を担当しています。具体的には、学内の先生方の授業(専門科目)を開放していただき、系統的な学習の場に参加させていただくというものです。この研究・実践講座を修了された方々には「カレッジ・マスター」という称号を付与し、現在50名を超える方々が地域の指導者として各種委員や研修講師等でご活躍いただいています。

そのような学習経験をもち、地域での活動にも積極的に関わっているカレッジマスターと学生との「キャリア懇談会」を実施しました。これは現代GP(キャリア教育)の事業の一環として行ったものでもあります。現代GPの申請をする際に、伝統的學生を対象とはしない生涯学習教育研究センターにできることは何だろうかと考えたときに、学生のキャリア意識の醸成に多様な経験をもつ社会人学生との交流は一定の意味を与えることができるのではないかという発想からでした。一方で、大学と県教委とが連携して養成した指導者を積極的に活用する機会としても有効ではないかと考えました。

キャリア懇談会は18年度に合計3回実施しましたが、カレッジマスターとの懇談会は12月13日(水)12:30～15:30に実施しました。今回はこのレポートを中心にします。

今回ご協力いただいたカレッジマスターは女性5名でした。ひとつにはジェンダーの視点から女性のキャリア形成を見つめたいということ、つまりこれまでの社会で複線型(あるいは選択型)キャリア形成をしてきた女性にスポットをあて、懇談会を企画しました。女子学生には社会的な性差に直面する前に、女性としての自分の現在の、そしてこれからのキャリアについて意識してもらいたいという意図でした。カレッジマスターは、学生や学生の母親に近い年齢で30代前半から40代半ばまで、子育てを経験しており、職業は専業主婦、パートタイム、自営業、再就職してフルタイムと多様なステージにいる方に依頼しました。(大学の授業を受講できるという条件から、いわゆるキャリアウーマンや独身女性などは含まれないという限界はありますが、それは別の機会に譲ります。)

学生は「キャリアデザイン入門」の受講生を中心に28人参加し、家庭的な雰囲気の中、懇談が行われました。学生の感想としては「すごく参考になった」「結婚や育児など女性としてのキャリアについて聞くことができてよかった」「(カレッジマスターが)一方的に話すのではなく、こちらの話しも聞いてくださり、とても楽しく過ごせた」などがありました。

(文責:清國)



2. 参加型学習への誘い～専任教員の研究・実践紹介(1)～

過去のニューズレターで、成人教育の方法や社会人学生の調査結果を紹介してきました。今回はよりプラクティカルな学習支援方法について、私自身の研究と実践に基づきご紹介いたします。実際には社会経験の豊富な成人学習者を対象とした講座で実践しているものですので、学校知の中で過ごしてきた伝統的學生にそのまま当てはめることはできないことは予めお断りしておきます。

教育や学習支援の基本的な考え方は、いかにモチベーション(内発的動機)につながるインセンティブ(刺激誘導)を与えられるかにつきると考えます。留意しなければならないのは、内発的動機に展開しない刺激誘導は、さらに刺激への依存を高めるということです。子どもでいえば、「成績が上がれば欲しいものを買ってあげるよ」といった類で、努力とモノがイコールで結びつけられ、刺激誘導は結果的に刺激(モノ)がなければ努力をしなくなるか、不平不満がたまることになります。自分で自分を制御することができなくなりますし、そもそも学習することの意味自体が見えなくなります。これは人間としてはあまり幸福な状況とはいえませんが、(拙稿「学習支援方法の諸相」鈴木眞理他編『社会教育の基礎』学文社2006)

子どもに限らず、私にも、あるいは私たちにも大なり小なりそのような傾向が見られます。大学は企業ほどではないにしても、ここ数年かなりの勢いで成果主義や評価主義が導入されてきました。仕事が数値化されるようになると、数値の信憑性よりも数値そのものに価値が移り、人の相対的位置がある意味はつきりしてきます。そうなればそれに見合う(と考えられる)対価を要求するようになります。一見、高いモチベーションによって動いているように見えますし、成果もあげているのですが、寄り道や回り道、無駄がないという意味では考えさせられます。あまり踏み込むと火傷をしそうですので、この話題はこれくらいにしておきます。

脱線しましたが、現在私が取り組んでいる参加型学習の中でも特に力点を置いているのがラベルワークとランキングです。ラベルワークというよりは、KJ法という呼び名の方が馴染みがあるという先生方も多いことでしょう。自分の考えやアイデア、調査データ、経験等をカードに書き出して、それを分類整理するというものです。川喜多二郎氏が開発したということでKJ法とも呼ばれていますが、登録商標ということもありここでは一般的な名称のラベルワークを使います。



その中で何を行っているかについては、紙幅と時間の関係で次のニューズレターに譲るとして、その成果の一例を示します。(文責:清國)

センター雑感

今年度はセンター専任教員2人とも新設のキャリア支援センターとの併任となり、忙しくも、センター間の連携が進んだ一年でした。こういうときに限って原稿依頼も重なり、督促電話・メールに怯える毎日です。

さて、この4月からは組織再編により、当センターはアドミッションセンター、大学教育開発センター、キャリア支援センター、留学生センターと一緒に教育・学生支援機構の一部となります。センター教職員一同、気を引き締めて業務に励む所存です。今後もより一層のご支援のほど、よろしくお願いします。(山本)